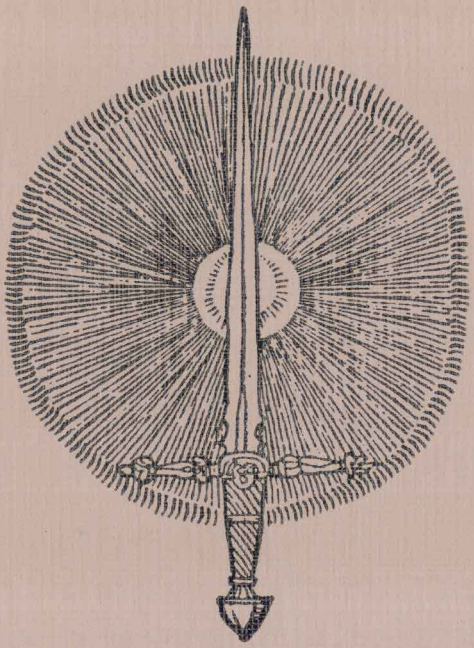


sanpo
non-fiction

仁田　義男
にった　よしお
大正11年兵庫県に生まる
1958年「文学界新人賞」受賞
作品／「無名の碑」「墓場の野師」ほか
現在所／東京都杉並区上井草30

やはり神さまはいた　日本の巌窟王

定価320円

1963年4月10日／初版印刷
1963年4月20日／初版発行

著者／仁田義男
発行者／中島　宏
印刷者／矢部富三
発行所／株式会社　産　報
東京都千代田区神田佐久間町1—11

印刷／三松堂印刷
製本／土開製本
©1963　乱丁・落丁本は書店または発行所でお取換えします

編集担当／松本祐三

日本の巌窟王

やはり神さまはいた

仁田義男 著

●産報ノンフィクション

悲願実り日本晴れ

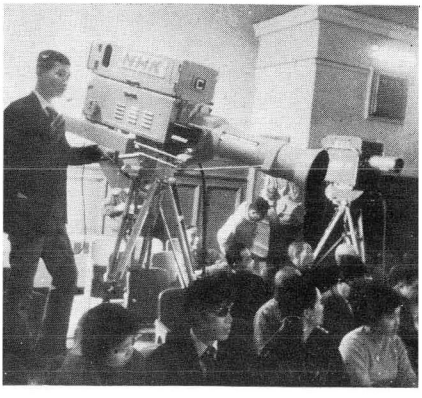
▲家族や知人にかかえられてバンザイを叫ぶ吉田翁

▼無罪は決った！　喜びの乾杯を高く掲げる吉田翁

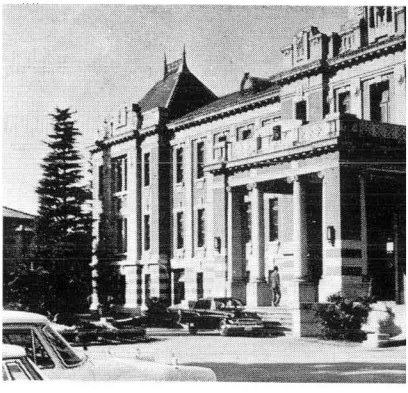
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

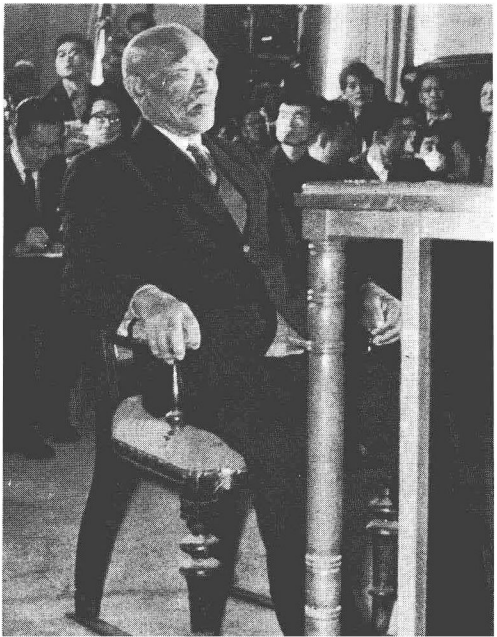
▲判決を下す法廷。吉田翁を中央に手前弁護団，向う側検察席，裁判官席中央は小林裁判長

▼撮影時間は三分。法廷初登場のテレビ・カメラ



▼世紀の裁判が行われた名古屋高裁



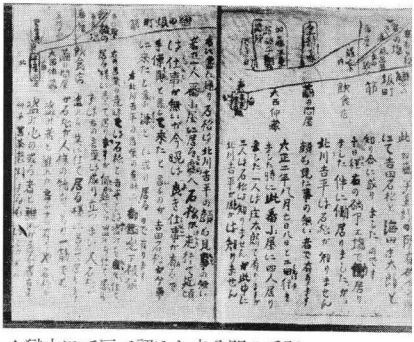


判決を下す
名古屋高裁
法延

◀二十余年間の苦難の獄舎にあっても，つねに無実を叫びつづけてやまなかった吉田翁——被告席に坐った翁はじっと正面をみつめ，確信のあるおももちで微動だにしなかった

耐えぬいた五十年

ぼう大な調書と獄中で認めた吉田翁の手記二冊▶



冤罪の獄窓廿年今年
喜歡譚奇 王窟巖 様今

日光 街道の劇的對面
"申譯ない"と詫證文

▲土下座して謝る海田とその詫び証文。都新聞

▲獄中にて涙で認めた未公開の手記

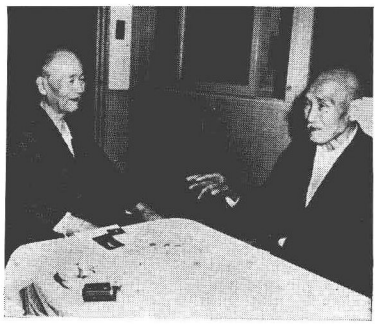
▼突止めた北河芳平左とその詫証文。名古屋新聞

▼出獄後事件現場に立つ吉田石松翁

▲昭和37年12月法延で声もふるえて訴える

▲再審決定。名古屋駅に着いた吉田翁を取材

▼耐えぬいた網走の冬を昔の雇主に涙で語る



▼衆議員法務委員会で無罪を出張した吉田翁

裁判は終った

自宅の吉田石松翁

▲やすらぎの朝。陽の光は眩しく翁の上に溢れて

▲無実の喜びは翁には語りつくせない

▼風雪と共に歩んだ吉田翁の家≪栃木県美田村≫

▼巴波川の上手にもやっと春の訪ずれ

やはり神様はいた／目次

プロローグ
異例の再審裁判 15
一章
四十九年前の夜 19
三つの影 23
流転 29
笛と血 39
不在証明 45
白と黒 50
解けた捕縄 59

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

判決 62
罪の確定 66

二章

もう一つの世界 71
戒具 77
檻の中 81
止っていた時計 89
折れた箸 98
風に吠える 106
来る日、消える日 120
愛と知恵 129
「おれの手だ」 136

手習い 143
別離 149

三章

岸辺の声 157
記者クラブ 169
母と子 176
法律事務所 182
「見つけたぞ！」 192
「恋ノ坂」 206
片輪車 213
伴侶 221
渦と炎 231

四章
署名運動 241
巴波川 254
立会訊問 263
法務大臣に会う 272
人権擁護委員会 279
幕ひらく 286
五十年の証言 296
エピローグ 303
判決

日本の巌窟王

やはり神さまはいた

写真提供／中部日本新聞社
東京新聞社

プロローグ

異例の再審公判

昭和三十七年十二月六日午前十時十五分、名古屋高等裁判所において、わが国裁判史上異例の公判が開始された。この裁判は「被告人、吉田石松に対する強盗殺人事件再審公判」と呼ばれたが、もちろん、これまで、被告人あるいは検事側からの控訴上告によって、再審、やり直し裁判の行われた例はけっして少なくはない。

だが、この「吉田石松再審裁判」の特異な点は、被告人、吉田石松がすでに刑期を満了しているということである。判決の確定した後、服役して刑期を終った被告人が、改めてやり直し裁判を正式に要求した例は、わが国近代裁判史上でも稀有な事実である。

しかも、事件は、四十九年前の出来事だった。当時の調書、起訴状、証拠物件などはすべて焼失してしまっている。公判の鍵になるものは、被告をふくむ当時の事件関係者の証言と、それに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.